

進化：生命の発現

——ベルクソン哲学の生命概念をめぐる——

東 昌紀

(和歌山大学非常勤講師、哲学)

この論考は、アンリ・ベルクソン (Henri Bergson 1859-1941) の哲学における生命概念を素描することを目的としている。ベルクソンが生命の問題を正面から取り上げたのは『創造的進化』(1907)である。この著書で彼は、物質と精神との緊張状態において精神が物質を超越する有様——これこそ真の生命の発現である——を開示しようとするのであり、既存の進化論が示すような目的論的に展開する一方向的ないわゆる「進化」の歩みは跡付けられてはいない。それどころか、単系列で、生命全体が知性に向かい発展するというアリストテレスの自然論にまで遡る進化論は否定されたのである(『創造的進化』211)。ベルクソンは端的に次のように述べている。「アリストテレス以来受け継がれているもので、大部分の自然哲学をだめにしている重大な誤謬は、植物的生活と本能的生活と理性的生活を、発展する同じ一つの傾向の連続する三つの段階と見做すことである」(『創造的進化』167)。ベルクソンは、連続する進化に単に程度の差異しか認めない進化論を否定し、進化の傾向に本性の差異を見出し、進化そのものに生命概念を読み解こうとしているのである。

ベルクソンが生命概念を検討するに至ったのは何故だろうか。その理由の一つは、彼の精神と物質との関係性の把握の仕方にあったように思われる。彼は『創造的進化』に先立つ著書『物質と記憶』(1896)において、精神と物質とが最も接近する存在論的な領域を探り当て、そこに自発的で予測できない運動をする生命体の出現とこの生命体の進展について言及していた(『物質と記憶』304)。したがってベルクソンの生命概念を示すためには、まず第一に、彼が精神と物質との関係をどのように捉えているのかを検討しておかねばなるまい。

ベルクソンは、『物質と記憶』において精神の実在性と物質の実在性を肯定し、その関係を記憶の分析を手がかりに規定しようとする。ベルクソンの議論の組み立ての形式は、たいていの場合、問題を惹起する仮説の行き過ぎたところを見つけ、彼の言う「常識」にまで引き返したうえで、当の問題を最も和らげる見解によって問題の調停を図ることに存している。もっとも「思惟の習慣を、さらには知覚の習慣を捨て去ることだけでも既に困難なことなのであるが、しかもそれすら、為すべき作業の否定的な部分でしかない」(『物質と記憶』227)と語られているところを見ると、ベルクソンが単なる折衷的な解決に満足していないことは明らかである。問題に解決を与えよう場を開き、その領域においては当の問題が実は偽の問題であったことを了承させることが、確かに目指されていたが、その目的はベルクソンが開いた領域を前提にする。ベルクソンはいったいどんな領域を開いたのであろうか。

第1章 純粹知覚

調停が図られねばならない問題の一つは、精神と物質の二元論に起因するものである。それは實在論と觀念論における、それぞれの物質についての概念に関わる。實在論では、物質は、表象を生み出す原因だが、表象とは性質が異なると考えられている。一方觀念論では、物質は私たちがそれについて持つ表象に帰着させられている。

ベルクソンは、實在論、觀念論双方の物質の見方に反対して、私たちの知覚に現われるものを「イマージュ」(image)と定義する。それは「觀念論や實在論が、物質の存在と物質の現象へと分離する以前の物質」(『物質と記憶』16)を意味する。何故イマージュであるのか。それは「私たちが一挙に物質のうちに身を置いている」(『物質と記憶』83)ことを示そうとするためである。実際において、實在論、觀念論いずれの側に立つかなど問題にするに先立って、既に知覚は始まっているのである。實在論、觀念論の観点は私たちの知性によって構成されていたのであり、私たちはこの構成に依拠しつつ、遡って物質の概念を作り上げていたのである。實在論、觀念論における物質の概念は、認識に関わる知性のフィルターを通した見方であり、この見方は既に物質に対して距離をとっているのである。ベルクソンは何よりもまずこうした習慣化された思考を排除しようとする。「私が感官を開くと知覚され、閉じれば知覚されなくなるような、最も漠然とした意味での、いくつものイマージュのただ中に私がいる」(『物質と記憶』25)のである。

「イマージュの総体」において私の身体なるものが切り出されてゆく。私に現われる幾つものイマージュの中で、他のイマージュに比べて恒常的で、他のイマージュがそれとの関係で変化を被る一つの特権的なイマージュがある。それは私の身体である(『物質と記憶』27)。わずかな変化でも、他のイマージュを動かすことになるこの身体は作用の中心である。「私の身体を取り囲む対象は、私の身体のそれらに対する可能的作用を映し出している」(『物質と記憶』30)と言い換えることができる。この仮説によって、イマージュの総体が物質であり、身体の可能的作用に関係付けられているイマージュが物質の知覚であると定義されるのである(『物質と記憶』31)。このようにして、物質と知覚との間には本性の差異がないことが示された。すなわち「物質には実際に与えられているものに加えて他のものはあるが、異なる(本性の)ものはない」(『物質と記憶』92)のである。「私の知覚は対象そのものの一部であり、対象が知覚のなかにあるというよりも、知覚が対象のなかにある」(『物質と記憶』28,223,280)ということになろう。知覚は事物のうちに置かれ(『物質と記憶』284)、知覚と知覚の対象との部分的合致(『物質と記憶』84,86,223,280)が容認されるのである。身体、とりわけ脳は、表象を生み出しているのではなく、選択の器官なのである(『物質と記憶』41-2)。

以上の考察から、ベルクソンは「純粹知覚」(perception pure)の理論を明らかにする。純粹知覚は「事実上ではなく権利上存在する知覚であり、私が存在するところに位置づけられ、私が生きているように生きているが、現在にのみ没頭し、あらゆる形の記憶が消去されて、物質の直接的瞬間的なヴィジョンを獲得することができる存在が持つだろう知覚である」(『物質と記憶』46-7)。ベルクソンが純粹知覚をア・プリオリに規定しているかのような印象を私たちに与えるが、彼の意図は別のところにあった。ベルクソンにとっては「知覚が、どのように生じるのかではなく、どのように制限されるのか」(『物質と記憶』

54) が問題であり、「知覚は権利上全体のイメージであるはずなのだが、事実においては主体の利害に関わるものに限定されている」(同上) ことこそが説明されなければならないのである。

対象のなかに見出された知覚は単に鏡のように物質を映し出しているのではない。生物は物質間の必然的連関に不確定の要素を添加する。生物の現実的動作は物質間の必然的連関を差し止めることに存している。知覚はまさにそのとき生じるのである(『物質と記憶』43)。生物は「非決定の中心」(『物質と記憶』49,83)であり、「生物は、外的作用の中で、自分にとってはどうしてもよい作用を通過させる。そうではない作用は分離され、分離そのものによって知覚となる」(『物質と記憶』49)のである。生物の非決定性が導入されているだけであり、物質に何かが付け加えられたのではない。「イメージが存在することとそれが意識的に知覚されることの間には、本性の差異はなく、単なる程度の差異がある」(『物質と記憶』50,92)に過ぎないのである。

純粹知覚の理論では、可能的作用は、生物の出現によって、生物の「潜在的行為」(action virtuelle)へと変容し、活動の中心(『物質と記憶』62-3,285)となる。分離によるこの変容は可能的作用を制限することであり、したがって意識的知覚は可能的知覚に比べて貧しいのであるが、これは事柄の否定的な側面ではなく、むしろ積極的なもの、精神を予想させるのである(『物質と記憶』51)。

いったいこの変容の要因は何であったのか。ベルクソンが純粹知覚の理論の修正を余儀なくされたのは、純粹知覚の理論では記憶が完全に捨象されているからに他ならない。「実際には思い出(souvenirs)を含まない知覚は存在しない」(『物質と記憶』45)のである。その意味は「知覚をどんなに短く考えても、実際には常に一定の持続を占め、したがって、多数の瞬間を一つ一つ引き継がせる記憶力を要求する」(『物質と記憶』46)ということである。純粹知覚と、記憶力がそれに接合したりそこから切り取るものとが区別されなかったために、知覚は、誤って、強度の大きさにおいてのみ思い出と区別される内的で主観的なヴィジョンと見做されてしまったのである。知覚と思い出との間に本性の差異がある(『物質と記憶』93,292)ことを見過ごしてはならないのである。

ところで生物の意識的知覚が描き出す潜在的行為の選択は偶然に任されているのではない。この選択は過去の経験によって動機づけられていて、類似した状況が残した思い出に訴えることなしには起こらない。「実現される行為の非決定は、単なる気まぐれと混同されないためには、知覚されたイメージの保存を要求する」(『物質と記憶』85)。記憶力を意識的知覚の分析のなかへ導入しなければならないのである。

ベルクソンは上記の要請から、次の仮説を立てる。「記憶力、すなわち過去のイメージの存続を仮定すれば、そのイメージは現在の知覚に絶えず混入し、その代用になることさえありうる。なぜならイメージは、有用になるから保存されるのであり、現在の経験を獲得されている経験で充実することによって、現在の経験を補うからである。獲得されている経験はどんどん大きくなるので、ついには現在の経験を覆い、圧倒する。…以前の類似した直観の思い出は、その後に起こったすべての出来事に結びつけられ、私たちの決定をそれだけよく照らし出すので、直観そのものよりも有益であるという理由で、思い出は実際の直観に取って代わる」(『物質と記憶』85-6)のである。純粹知覚の理論で示された物質の知覚と、記憶力がそこに付け加えるものとは比較にならない。それは瞬間と持続

との懸隔に一致するのである。物質の知覚の役割は、思い出を呼び出し、実質を与え、賦活し、現勢化する。「知覚は、結局は、想起の機会に過ぎない」(同上)のである。純粹知覚と思い出とが有用性の度合いに応じた割合で混じりあうところに、意識的な知覚が成り立つとすることができるだろう。

このようにして、ベルクソンは純粹知覚と「純粹記憶」(mémoire pure)とを区別する(『物質と記憶』92)。純粹記憶の導入は唯物論と唯心論との行き過ぎをそれぞれ緩和し、両者を調停することにもなっている。純粹知覚の仮説は、物質には表象を生み出す作用がないことを示した。それは物質に意識的事象を作り出す能力を認める唯物論への反論である。この主張によってベルクソンは物質から独立した実在として精神的現象を考察する道を見出したのである。それと引き換えに、物質に対して否定されているすべての性質(唯心論が精神による表象と考え、唯物論が延長の偶有性にしたもの)を物質に返したのである。物質に対するこの常識的態度は、精神の独立的存在の肯定を要請するのである。純粹知覚理論の修正はまさにこの点に関わっている。「実際には知覚から切り離せない記憶が、現在に過去を加え、さらに持続の多数の契機を唯一つの直観のなかに収縮する。こうした二重の作用によって、記憶は、私たちが、権利上物質において物質を知覚するにもかかわらず、実際には私たちのうちでそれを知覚する原因となっている」(同上)のである。「純粹知覚は私たちに物質の全体、すくなくともその本質的なものを与え、残りのものは記憶力に起因し、物質につけ加わるのだから、記憶力は、原理上物質から完全に独立した力ではなければならない。したがって、精神が一つの実在であるならば、記憶力の現象においてこそ経験的に精神に触れることになるに違いないのである。それゆえに「純粹な思い出(le souvenir pur)を脳の働きから派生させようとするどんな試みも、分析すれば、根本的な錯誤が明らかになるはずである」(『物質と記憶』94-5)。次章では意識的な知覚を構成するもう一方の理論、純粹記憶の理論を検討しなければならないだろう。

第2章 純粹記憶

意識的な知覚を単純なもの、単一の現象と見做せば、知覚と思い出との間には単に程度の違いしかないことになり、思い出は相対的に強度の弱い知覚、反対に知覚は相対的に強度の強い思い出となろう。この場合には、過去と現在との本質的な差異が見失われてしまう。ところが「私たちの知覚の現実性は、知覚の活動性すなわち知覚を継続する運動に存している」(『物質と記憶』88)のであり、「私を動作に誘うもの」(『物質と記憶』171)である。反対に「過去は本性上もはや作用しないもの」(『物質と記憶』89)、「本質的に無力である」(『物質と記憶』171)。ここに両者の本質的な差異が存しているのであり、この本性上の差異が見失われてはならない。

ベルクソンはこのような事態を説明するために、「純粹記憶」(mémoire pure)の理論を提示する。それはちょうど、純粹知覚の理論において知覚がイメージの総体から切り出されたように、純粹な思い出から「記憶イメージ」(souvenir-image)が切り出されることを説明する理論である。「私の過去から、動作に協力し、その態度に同化しうるもの、要するに役立つものだけがイメージになる。...しかし、過去は、イメージになるや否や、純粹な思い出の状態を去って、私の現在の一部になる。イメージへと現実化し

た思い出は、純粋な思い出とは根本的に異なっている。イマージュは現在の状態であり、その出所となった思い出によってのみ過去の性質を帯びている。反対に（純粋な）思い出は、役に立たなければ、...現在と結びつかずにいる」（『物質と記憶』175-6）のである。まさしく「純粋な思い出は、潜在的な状態にある」（『物質と記憶』294）。私たちは、物質のうちに身を置いていたのと同様に、「一挙に自分自身を過去に置く」（『物質と記憶』294）のであり、「過去へと退かねばならない」（『物質と記憶』103）のであり、「一挙に過去へと身を置かなければ、決して過去に達することはない」（『物質と記憶』168）のである。この事態は純粋な思い出が潜在的だからこそ仮定できるのである。

記憶イマージュはどのようにして現実化されるのであろうか。その現実化は、現在の動作のために過去の経験を利用する作用、すなわち再認として確認される。再認は二つの異なる仕方を実現する。なぜなら過去は、一方で運動機構において、他方では独立的思い出において存続するからである。したがって再認は、前者では運動によって、後者では表象から生じることになる（『物質と記憶』100）。この仮説に根拠があるのは、記憶作用に二つの形式が認められるからである（『物質と記憶』101,113）。

ベルクソンは記憶の二形式を説明するために学課を記憶する場面を例に取る（『物質と記憶』101以下）。ある文章が記憶できたというとき、わたしはその文章をはじめから最後までいつでも反復できるようになっている。暗唱できるようになった「学課の記憶」（*souvenir de la leçon*）は習慣の特徴を備え、身体の自動的運動として実現されうる。これに加えて、私は繰り返された学科の音読の復習の場面を自分の過去の出来事として心に思い浮かべることもできる。私の過去の出来事である「音読の思い出」（*souvenir de la lecture*）は、まったく習慣の特徴を持たない。この二つの思い出の間には本性上の差異がある（『物質と記憶』103）。前者は動作であり、後者は表象である。暗唱できるようになった学科を繰り返すために音読の記憶は必要ではない。途中で思い出せなくなった（運動が停止した）ときには、また最初からやり直す、つまり一連の運動の全体を再構成しさえすればよい。それ故に、互いに独立した二つの記憶作用があることになろう。後者の「記憶作用は、記憶イマージュの形態において出来事をその生起に従って記録する。...一つ一つの出来事、動作にその位置と日付をとどめる」（『物質と記憶』104; cf.108,188）。ところでどんな知覚も活動の中心であるから、現実的動作へと展開しなければならない。「イマージュが、ひとたび知覚され、この記憶のうちに固定され並べられるにつれて、そのイマージュに続いて起こった運動が有機体を変容し、身体のうちに行為への新たな傾向を生み出す。このようにしてまったく異なる秩序の経験が形成され、身体に沈殿する。それはすっかり準備された一連の機構となり、外部の刺激に対する反応の数をいままでよりもさらに増やし、多様化させる」（『物質と記憶』105）のである。音読の記憶とはまったく異なるこの記憶の作用は「もはや過去を表象するのではなく、過去を実演する」（同上）のである。

このように、記憶イマージュを生む記憶と反復する記憶が説明される。前者は過去へと遡ろうとし、そのためには現在の動作から遠ざかろうとするが、後者は私たちを動作へと促し、未来へと向かっている。二つの独立する記憶作用、すなわち「自発的記憶力」（*mémoire spontanée*）と「運動的記憶力」（*mémoire motrice*）が競合しあい、現実的な意識が成立する（『物質と記憶』109）のである。「私たちの現実的な意識は、...過去のイ

マージュのなかから、現実の知覚と結びつき、有益な全体を形成することのできないイメージをすべて排除する」(『物質と記憶』109)。睡眠中に夢を見るのは、運動的記憶力の規制が外れているために、記憶イメージの介入を阻止できないことに起因すると考えることもできるのである。「私たちの過去は、現在の行為の必要によって制止されているので、私たちにはそのほとんどすべてが隠されているとしても、私たちが有効な行為への関心を失い、いわば夢の生活へと向かうたびに、意識の識域を乗り越える力を取り戻すことになる。睡眠は、...まさにこの種の離脱を引き起こす」(『物質と記憶』192)のである。

以上の記憶作用の分析を踏まえ、ベルクソンは再認の機構を解明する。運動的記憶力の存在が既に認められているので、再認が必ずしも記憶イメージを必要とするものではない(『物質と記憶』118)ことはわかっている。まず第一に、運動的記憶力、すなわち身体によって行われる「瞬間的再認」(同上)がある。この種の再認は、よく通いなれた町並みを、その道順に注意を払うことなく、散歩するような場合に顕著だろう。通い続けるにしたがって、「最初は自分の知覚だけを際立たせていた状態から始まり、ついにはもはやほとんど自分の自動運動についての意識しかもたない状態へと至る」(『物質と記憶』119)。既に準備された運動についての意識が熟知の感情を支えるのであり、再認の基礎には運動的次元の現象が存在すると考えられる(同上)。動作を準備する習慣が出来上がっている、対象を利用する仕方を知っているので、知覚は現実的動作へと展開するのである。

具体的な知覚が成立するときの運動的記憶力の役割は大きく、日常生活では、「私たちは普通、再認を考えるに先立って、再認を演じる」(『物質と記憶』121)のである。しかしこれが再認のすべてではない。先に述べたように、私たちの現実的な意識は、過去のイメージのなかから、現実の知覚と結びつくことのできないイメージをすべて排除する。自動的再認は、動作を準備するために、過去のイメージを遠ざけるのだが、同じ理由で、現在の知覚に寄与する記憶イメージを準備するのである。「現在の知覚に類似する表象が可能な限りの表象の中から選ばれねばならない」(『物質と記憶』121-2)のである。このように、現在の知覚のうちに入り込める記憶イメージは意識の表面に現われなければならないのであり、「機械的再認を引き起こす運動は、一方ではイメージによる再認を妨げ、他方ではそれを容易にする」(『物質と記憶』122)のである。したがって、記憶イメージの規則的介入を要求する再認、「注意的再認」(『物質と記憶』125)を検討しなければならない。もちろん「この再認も運動から始まる。しかし自動的再認においては私たちの運動は私たちの知覚を展開し、そこから有用な結果を引き出し、このようにして私たちを知覚された対象から遠ざける」のであるが、記憶イメージの介入する再認では「私たちを対象へと引き戻し、その輪郭を強調させる」(『物質と記憶』125)。自動的再認においても、記憶イメージの介入はありうるだろう。既に瞬間的再認と一緒にあって、記憶イメージが一義的、機械的に選択されている場合である。この場合には注意は精神ではなく身体の一般的な順応によって定義されるだろう(『物質と記憶』127-8)。これは真の意味での注意の定義ではないだろう。自動化されているというその限りで、この再認を「非注意的再認」ということができるだろう。それではいったい注意とは何であろうか。

「注意は本質的な結果として、知覚をいっそう強化し、その細部を引き出す」(『物質と記憶』127)。注意によるこの強度の増大と外的刺激に一致する強度の増大とはまったく異なるものであろう。なぜならこの場合の強度の増大は内部から生じているように思われる

(同上) からである。この差異にこそ、注意の積極的な働きがあり、この働きは思い出によって引き継がれるのである(『物質と記憶』128)。「外部の知覚が原因となって、私たちの方からその主要な輪郭を描く運動をなすとすれば、私たちの記憶力は受け取られた知覚へ、この知覚に類似する過去のイメージを、私たちの運動によって既に素描されている過去のイメージを差し向けるのである。このようにして記憶力は新たに現在の知覚を創造する。より精確に言えば、記憶力は、現在の知覚にそれ自身のイメージ、あるいは同種の何らかの記憶イメージを送り返し、この知覚を二重化する」(『物質と記憶』128-9)のである。この二重化は注意の強度が増大すればそれだけ記憶の深い領域にまで入り、それだけ記憶力は知覚を強め豊かにし、それに応じて知覚のほうもますます展開し、さらに多くの補足的思い出をひきつけてゆく(『物質と記憶』129)。具体的な知覚はこうしてますます判明になるのであるが、その道筋は恣意的なものではなく、必ず、運動へと向かう知覚に依拠しつつ、現在化するのである。有為的注意によって動作は引き止められる。そのことによって「精神は自分が拠って立つべき高さを確定し」(『物質と記憶』147)、知覚の判明さと記憶力の深化がつりあう対称的な点を自らのうちに選び、「知覚を覆うことになる思い出を知覚へと流入させるのである」(同上)。注意的再認が記憶イメージを現在化するためには、動作へと向かう機械的再認、その大部分が身体的習慣となり、身体によって演じられる非注意的再認を機会原因としている。記憶イメージは現実化することによって、純粋な思い出とはまったく異なる性質に変容し、現在の知覚の一部となるのである。

このように思い出の現実化を説明する注意的再認は、同時に、現在化を阻まれ、意識の識域を越えられない過去の独立的存続の承認を要請することにならないだろうか。イメージへと現在化した思い出は純粋な思い出とは根本的にその存在の仕方が異なっている。前者は行為に役立つために現在化し、知覚の一部になっているのに対し、純粋な思い出は根本的に無力であり、現在化できずに、潜伏する。このようにして純粋な思い出が潜在的状態で保存されていることが主張された(『物質と記憶』176)。なぜならば「意識が現存する」と言うとき、この意識は現実的、活動的なものであることを意味する。このことは同時に、活動しないものが意識には属さないことも意味している。そうであるならば、活動しないものが何らかの仕方で現存しつつ、意識には与らないということがありうるはずである。つまり「意識がある」ということは「現存」と同義語ではなく、単に「現実的行為や、差し迫った有効性があるということ」と同義語なのである(『物質と記憶』176)。「再認は、純粋な思い出を純粋記憶のなかに探しに向かい、現在の知覚に触れて徐々に思い出を物質化する、多少なりとも強い意識の緊張を前提とするのである」(『物質と記憶』292)。

注意的再認において記憶イメージがその有効性に応じていつでも現実化する状態にあるとすれば、私たちは過去の独立的存続ということを認めなければならない(『物質と記憶』186)。このようにして、純粋記憶の理論において過去の存続が肯定されたのである。純粋知覚の理論によって私たちは物質の世界に一拳に身を置き、同時に純粋記憶の理論によって私たちは過去に一拳に身を置くのである。「記憶イメージは、純粋な思い出の状態に留められていれば、無力なままであろう。潜在態である思い出を引き寄せる知覚によってしか、それは現実態になりえない。無力である思い出は、それが実現される現在の感覚から、自らの生命と力を受け取るのである。…判明な知覚は相反する二つの流れによって

現われるのである。一方は求心的な流れで外部の対象からやって来る。もう一方は、遠心的であり、純粋な思い出を出発点にしている。...流れが強まるに応じてそれだけ思い出は現在化する。二つの流れは、結びつくと、それらの合流点に、判明な再認された知覚を形成するのである」(『物質と記憶』160-1)。

純粋知覚と純粋記憶の理論によって、「現在は単に生起しつつあるもの」(『物質と記憶』187)でしかなく、「具体的で意識によって実際に生きられている現在は、大部分直接的な過去からなりたち」(同上)、「どんな知覚も既に記憶である」ということが示されたのである(『物質と記憶』cf.189)。このことはどういう意味を持っているのであろうか。ベルクソンは身体について次のように述べている。「ほかのイマージュの只中に存続し、私の身体と呼ばれるまったく特殊なイマージュは...、一瞬ごとに、一般的生成の横断面を構成する。したがって、身体は受け取られ送り返される運動の通過する場である。私に働きかけるものと私が働きかけるものとの連結線、一言でいえば感覚 - 運動現象の座である」(『物質と記憶』189; cf.100)と。身体というイマージュが物質世界の中から「私の」身体になるということは、純粋知覚と純粋記憶の、結局は物質と精神の合流点で(『物質と記憶』295,299)すなわち物質と精神とが最もせめぎ合うところに、具体的な意識の座として私の身体が削り出されるということを表わすのである。精神と物質との相互作用において身体は顕現する。ベルクソンは純粋知覚と純粋記憶の理論によって、物質と精神のそれぞれの独立的存続を肯定した上で、改めて「精神と身体との結合に関する問題を最も狭い極限にまで絞り込んだ」(『物質と記憶』299)のである。ベルクソンが見出した領域は「純粋持続」(*durée pure*)と呼ばれる存在論的次元なのである(『物質と記憶』cf.228)。この領域では、物質と記憶という全く本性の異なるものが、相互の差異を最も際立った形でとどめたまま、相互に関係しあっている。この根本的な差異があるからこそ、精神と物質とが結び付こうとしているのである。

私たちの日常的な、いわゆる人間的な行為は、行為の便宜さを尺度にした知覚を前提にして、動作へと向かっている。精神と物質との結合の問題を解明するためには、純粋持続における精神と物質とのせめぎあいを見るためには、行為の功利性を越えたところへ、「経験をその根源にまで、より正確に言えば、経験が私たちの実益の方に傾き、経験がまさしく人間的経験になる曲がり角を越えたところに(*au-dessus*)まで、求めにゆくこと」(『物質と記憶』226)が残っている。私たちはその顕著な例を生命の進化に求めることができるだろう。

第3章 生命の発現

生命の進化の現場を上述の存在論的領域に求めるのは、正当であるのだろうか。生命進化の歴史を見ると、人間、特にその知性が進化の先端に位置するように思われる。それは「行動する能力に付属する物を、生物に課せられている生存条件へと生物の意識が徐々に精確、複雑、しなやかに適応することを、理解する能力として私たちに示している。ここから次のような結果が出てくるはずであろう。すなわち私たちの知性は、狭義には、私たちの身体をその環境へ完全にはめ込むことを保証し、外界の事物相互の関係を自らに示し、要するに物質を思考することに当てられている」(『創造的進化』7、以下『進化』と記す)

のである。人間の知性はただ物質にのみふさわしく、知性は思考するためには己の対象を固定してかからねばならないということは、ベルクソンの一貫した立場であった。そうであるならば「私たちの思考は生命の真の本性を、進化運動の深い意味を、自らに示すことはできない」(『進化』8)のではないだろうか。進化の動きを捉える方法の確立が、進化の運動の解明と平行して必要となるはずである。ベルクソンにとって、この方法こそが哲学の可能性を開くものなのである。

明らかに「生物は私たちの知覚や科学が人為的に孤立させ、閉じるいかなるものとも異なっている」(『進化』37)。固定されたものに対して、「生ける有機体は持続するものである。その過去は完全に現在のなかに入り込み、そこで現在化し、働いている」(同上)。具体的な知覚をとれば、「脳の仕掛けは精確に作られていて、過去のほとんどすべてを無意識へと押し返し、現在の状況を照らし出し、準備すべき行為を助け、要するに有効な働きを提示できるものだけしか意識のなかへと導かない」(『進化』25)が、前章で見出した純粋記憶の理論を考慮すれば、過去は「現在にのしかかり、それを外部にとどめておこうとする意識の門に押し寄せている」(同上)のである。生物の進化が意識の現実化の過程に類似することが気づかれるだろう。「持続は未来を侵食し、前進しながら膨らむ過去の連続する進行である」(同上)。したがって進化を、生物の意識という観点から考察するのが適当となるだろう。

植物と動物とを分けているものは何であろうか。それらの間の栄養摂取の違いがすぐに思い浮かぶ。植物は栄養を元素の状態で取り入れるのに対し、動物は元素が固定された有機物質を必要とする。例外はいくつもある。食虫植物は植物に分類され、菌類は葉緑素を持たず、有機物質を糧にする。したがって、この分類基準に当てはめても、必ずしも植物と動物が完全に二つに分類されるわけではないだろう。

進化の傾向から、それらを互いに分類できないだろうか。植物を動物から区別するその傾向は、植物の有機物質を作り出す能力である(『進化』138)。動物的生命の一般的傾向は、空間内での可動性である(『進化』139)。この分類基準にも例外が存在する。オジギソウの葉の運動や珊瑚の固着である。動物の固着性は進化の傾向が麻痺する状態として現れることが多く、植物的生命を連想させる性質を伴っている。植物の可動性はその個体の一部に限られるのが普通である。それぞれの進化の系列のいずれにも、別の系列の特徴である正反対の傾向を見て取ることができるのである。それぞれの傾向が進化の二つの方向を規定していることは疑い得ない。しかしながら「固着性と運動性もまたもっと深い傾向の表面的な特徴でしかない」(『進化』140)。何故だろうか。

運動性を考慮する際には、運動性と意識との関係を見落としてはならない。運動性が増せばそれだけ運動にともなう意識は広がる。反対に「最下等の有機体も、自由に動く限りにおいて意識的である」(『進化』141)ということもできるだろう。ところで運動せずに栄養を摂取する植物が意識的な活動性の方向に発展しえたはずはないのである(『進化』142)。植物は無意識の状態に落ち込んでいるのである。「意識は、寄生物に退化した不動の動物では眠り込んでいるとすれば、逆に運動の自由を取り戻した植物では意識はおそらく目覚める」(同上)ことも認められなければならない。上の二つの分類基準の場合とは違って、ここでの基準は傾向であり、傾向に過ぎないことが大切である。流れである進化は固定した概念によっては捉えられない。その理由を基準が曖昧であることに求めてはなら

ない。この基準によれば、動物の特徴を探すには動物進化の先端にまで昇らねばならず、植物に動物の進化の特徴を探そうとすれば、植物進化の系列を最も下にまで降りなければならない(『進化』143)ということなのである。

最後の結論は決定的な事実を表わしている。動物進化の系列と植物進化の系列へと向かう傾向が実際に存在しているのだから、「最初の生ける有機体が植物的形態と動物の形態との間で動揺し、それぞれの形態の性質を同時に帯びていたことは、疑いないように思われる」(『進化』143)。それぞれの進化の起源には共通の傾向が見出されるのであり、「動物には神経と神経中枢を与えるように仕向けた同じエラン(はずみ)が、植物においては葉緑素の機能にまで達したのに違いない」(『進化』145)のである。それが、運動性と固着性への道を開いたのである。

ところで、動物進化の系列はどうか。事実、「動物界の進化は、植物的生活への後退を除外すれば、二つの異なる道、一つは本能へと、もう一つは知性へと進む道づたいに実現されてきた」(『進化』167)のである。方向が逆向きの植物と動物のそれぞれの進化の傾向が同じエランに与っていたのと同じことが、知性と本能の傾向についても言えるだろう。

「本能の痕跡が見出されない知性は存在せず、とりわけ知性の量で取り囲まれていない本能は存在しない」(『進化』168)のである。本能に知性的なところがあるからといって、本能と知性が単に程度が異なるものであると思ってはならない。「実際にそれらが互いに随伴しあうのは、それらが互いに補い合うからでしかなく、それらが互いに補い合うのはそれらが異なっているからでしかない。本能のうちにある知性的なものは、知性のうちにある知性的なものと方向が逆なのである」(同上)。動物の進化の系列においても反対の方向を示す傾向が認められるのである。

知性とその最も進化した形で現われるのは人間であろう。人間が動物と異なって知的であるのは、人間の知性が「道具を作るための道具を製作し、その製作を無際限に変化させる能力である」(『進化』171)からに他ならない。ところで、動物は自らの身体を道具として所有している。そして「この道具に対応して、それを利用することができる本能が存在する。本能は有機組織の仕事の延長、むしろその完成であるので、動物の本能と生ける素材を有機的に組織する仕事とを明確に区別することは難しい(『進化』172)だろう。知性と本能の極限の例をとれば、「完成した本能は有機的組織を道具として使用し、そうした道具を作り上げさえする能力であり、完成した知性は無機の道具を製作し使用する能力である」(『進化』173)とすることができるだろう。有機的組織を道具とする本能はただ一つの目的しか目指すことができないので、本能は必然的に専門化し、したがって動物は自動的に振舞うようになる(『進化』174)。これに対して、知性の道具はそれ自体では自足せず、この道具は別の要求を無際限に生み出すから、活動はそれだけ自由になるのである(同上)。動物の進化の系列だけ見ても、やはり意識の問題が介入してくることがわかる。本能はどこまで意識的であるのだろうか。ベルクソンは植物にも本能を認めようとする(『進化』176)。これはベルクソンが主張する生命概念から説明されるだろう。『創造的進化』で示される意識は、『物質と記憶』において示された意識を凌駕することになるのである。次に『創造的進化』においては意識の意味がどれほど拡張されているのかを検討しよう。

繰り返しになるが、本能はどこまで意識的であるのか。本能は場合によって意識的でも

あり、無意識的でもある。特に動物の場合、本能の少なくとも一部は無意識的に行われている。ところで私たちは無意識というときには、二つの様態の無意識のことを考えている。意識がないという無意識(*conscience nulle*)と意識が無くされたための無意識(*conscience annulée*)である。いずれの無意識も無いのであるが、前者の無いは意識の存在の欠如である。落下する石の無意識は意識が無いという無意識である。後者の場合には意識が無いわけではない。無意識は「方向が反対で二つの等しい量が、互いに相殺し合い、互いに中和し合っている」(『進化』176-7)ところに成立する。

ところが、ベルクソン考慮する無意識は、これら二つの様態のいずれの無意識でもない。確かに「私たちが機械的に習慣的行為を遂行したり、夢遊病者が自動的に夢を演じるとき、無意識は避けられない。しかしこの場合の無意識は行為の表象が行為の遂行そのものによって阻まれていることに起因する。行為は完全に表象に類似し、精確にその表象にはまり込み、どんな意識ももはやみ出ることにはできないのである。表象は行為によって栓がされているのである」(『進化』177)。翻ってみれば、意識とは行為の表象に対する不一致を示しているのである(『進化』178)。

この意識を生物に戻してみよう。すると、意識は、生物が実際に遂行しつつある行為によって差し止められている可能的、潜在的行為の領域を照らし出していることがわかる。実現される行為に選択の余地が与えられている場合には意識は強度を増すが、ただ一つの行為しか選べない場合には、意識は無い。もちろん石のように意識を持たないのではなく、行為が表象を塞ぎ、意識が生じないということである。生物にはいつも過去が控えているから、表象を塞いでいる行為が妨げられれば、意識が現われるだろう。この観点に立てば、「生物の意識は潜在的な活動と現実の活動との間の算術的な差として定義されてもよく、意識は表象と行為との隔たりをはかるのである」(『進化』178)。したがって一般的に知性は意識に向かい、その認識は考えられ、本能は無意識へと向かい、実演される傾向にある。しかし知性と本能のこうした規定にも、程度の差異しか見出されない(『進化』179)のである。

本能と知性の本質的な差異は、むしろその認識の内容に存しているのである。認識に関しては、本能は事物に関わり、知性は関係に関わるのである(『進化』181)。これは、「知性は、生得的なものとして形式の認識であり、本能は素材の認識を含む」(『進化』182)と言い換えることができる。知性の認識作用は、先に触れたように、無生の物質、持続しないものを捉えることに適している。知性が関係を認識するには関係しあう項を固定してかからねばならない。持続する生命に対して知性は本性的な無理解である(『進化』200)。これに対して「本能は生命の形態そのものにあわせて作られている」(同上)のである。本能が有機的組織を道具としていることが、この事態を裏付けるだろう。「本能は生命が物質を有機化する仕事を引き継いでいるに過ぎない」(『進化』201)のである。したがって、本能の起源には、その最も本質的なものとして、生命の過程が見出されなければならないのである(同上)。

本能は生命の仕事をどのように引き継いでいると考えられるだろうか。ベルクソンの独創的な見解を私たちは次のように考えることができるだろう。本能は生命の持続に身を任せ、その流れに乗る。たとえばある生物に固有の持続の波に、本能は自らの持続の波を干渉させる。穴蜂は蟋蟀の運動神経節を刺激して麻痺させるのである(『進化』208)。ある

いは本能は己の持続のリズムをほかの生物のリズムに共鳴させると言ってもいいだろう。

「穴蜂とその獲物との間の（語源的な意味での）共感を前提し、それがいわば内側から青虫の弱点を穴蜂に教えるとするならば」（『進化』210）。穴蜂を昆虫学者（知性を代表する）になぞらえる必要はない。生命の持続は知性の手からすり抜けてしまうのである。共感を知覚や認識に優先させるまさにそのときに、哲学は自らの役目を始めるだろう（同上）。「具体的な、すなわちもはや科学的ではなく哲学的な説明は、まったく別な道に、知性の方ではなく共感に求められねばならない」（『進化』212）のである。

本能は共感であるから、この共感が自分の対象を広げ、さらに自分自身を反省することができたならば、それは私たちに生命の操作の鍵を与えてくれるだろう。しかしながら共感のままの本能にそれを期待することはできない（『進化』213）。知性は確かに私たちを物質へと導いてくれるだろう。そもそも知性は無機物の物体を扱うように作られているのである。生命の創造的進化を考えるためには、知性は、自分にとって自然な方向を逆転させ、身を振らなければならない（『進化』196）。すなわち傾向の正反対の流れを知性は獲得しなければならないのである。しかしながら知性にこれを期待することはできないだろう。ベルクソンが要求する直観は、「利害を離れ、自分自身を意識し、己の対象を反省し、それを無際限に広げることができるようになった本能」（『進化』213）である（この直観の典型は芸術家の直観に求められている『進化』214）。この直観は特殊な能力なのであろうか。そうではない。直観は知性を超えるとしても、直観をそこまで高めることになるのはやはり知性だからである。知性があるからこそ、直観は本能という形で実際に関わっている特別な対象に釘付けにされることなく、また対象によって移動運動へと外化されるがままになることもない（『進化』215）のである。

直観へと昇格した本能と知性はいわば円環を成し、意識が物質中を流れ、そこで見失われては再び見いだされ、分割されてはまた復元されるのを見ているからこそ、私たちは意識と物質が対立しているという観念、それらに共通の起源についての観念を形成するのである。生命の進化は、その起源のところから直観と知性の競合であり、その進化に沿って、意識と物質を削りだしてきていたのである（『進化』cf.222）。「あたかも意識の一つの大きな流れが物質の中に入り込み、どんな意識としても、相互に浸透しあう並外れて多数の潜在的なものを積み込んでいたかのようなのである」（『進化』218）。この意味で、意識は生命の現われであり、進化の動力源（*principe moteur de l'évolution* 『進化』219）なのである。ベルクソンが意識と表現したのは、それよりもよい言葉がなかったからに過ぎない（『進化』282）。彼は、創造の要求である意識を「超意識」と呼ぶことを提案してもいる（『進化』309）。

以上、植物と動物との進化の傾向の違いを示し、次に動物の系列における二つの向きがまったく逆の進化の傾向を示した。進化の運動は物質の世界へと入り込む意識の流れ、しかも入り込むに従ってそれだけ物質も意識も削り出されるような流れの様相を呈している。言葉を変えれば、知性によって直観にまで昇格した本能と知性との円環運動が進化の運動の動力である。このような進化の運動は『物質と記憶』を検討した際に確認した純粹記憶（精神）と純粹知覚（物質）とがせめぎ合う存在論的領域の様相そのものであることに気づくだろう。ベルクソンは、「純粹持続、過去がいつも前に進み、絶対的に新しい現在で絶えず増大している持続」（『進化』240,247）を進化の運動のなかに置き戻したのである。

『物質と記憶』で示された、私の身体を物質世界の中から切り出す純粹持続は、『創造的進化』で示された進化の運動においては、無数の生物がさまざまな程度において生きる意識の無数の平面のうちの、たった一つの平面に過ぎないことになる。しかしこの意識の平面を生きること、同じことだが生物が自分の体を持って物質世界へと入り込むことが、進化の力、生命の原初のエランの発露であるといえよう。「生命は、物質と接触していれば、一つの衝動、エランに比べられるだろうが、それ自体で見れば、生命は無限の潜在性であり、何千もの傾向の相互浸透なのである。もっともこの傾向が何千にもなるのは、相互外在的にすなわち空間化されたときでしかない」(『進化』305)のである。生命は、進化の根源的な生命性として、進化の系列において生物が削りだされるところに確認されるのである。

註

本文中の引用の頁数は、次の邦訳のものである。

『物質と記憶』(高橋里美訳)岩波文庫

『創造的進化』(真方敬道訳)岩波文庫

引用文は、訳語と文体の都合上、必ずしも邦訳には従っていない。